

パーソナリティのタイプによる箱庭表現の特徴について

相馬 壽明*・茂泉 朋子**

（1993年10月18日 受理）

The Relationship Between Personality Types and Sandplay Characteristics

Toshiaki SOUMA and Tomoko MOIZUMI

(Received October 18, 1993)

問 題

箱庭療法は、イギリスのローエンフェルトが考案したワールド・テクニクを原型としており、スイスのカルフは、この技法の治療的側面を重視し、表現の解釈にユングの分析心理学を応用して成人にも適用できる表現療法として確立した。そしてカルフの教えを受けた河合隼雄は1965年にこの技法をわが国にはじめて導入し、それ以降、心理臨床の各領域で適用され、飛躍的な発展を遂げてきた。

わが国では箱庭療法は治療技法として発展してきたため、その研究には臨床事例を中心としたものが多い。しかし、年齢や性別、パーソナリティなどによる表現の傾向について実験的に基礎的事実を明らかにすることは、実際の治療場面において箱庭作品を理解するための有効な手がかりを与えるため、箱庭療法についての基礎的研究も岡田（1984）、木村（1985）等を中心としてなされている。発達の観点から見た箱庭表現の特徴や傾向については、岩堂・奈比川（1970）、岩堂・木村（1971、1972）、秋山（1974）、岡田（1981）等の研究がある。これらの研究では年齢、性別、特殊な条件（能力や生育史など）を持つ群の平均的な箱庭表現について数量的にとらえた特徴がいくつかあげられている。岡田（1972）は、玩具が置かれた領域と空間象徴理論の対応から正常群と異常群の関係を比較し、異常群が箱庭の下側領域に人や動物を多く置き、臨床的に自己像が多く置かれると思われる中心部に家を多く配置することから、エネルギーの低さや萎縮性、家との共生的な関係が見られるのではないかと考察している。また箱庭表現と他の心理検査との関連をとらえようとする研究も行なわれている。木村（1982）は、大学生を被験者としてY-G性格検査との関連を比較し、使用玩具数は活動性、エネルギーのレベル、外界への関心、強迫的傾向と関連し、砂の使用は適応、安定といった側面に関連が深いと考察している。同様にパーソナリティとの関連を検討したものに、Qカード分類による制作者のタイプとの関連を調べた研究があり（岡田・木村、1975）、外向型、合理

*茨城大学教育学部障害児教育講座（〒310 茨城県水戸市文京2丁目1-1）

**茨城大学大学院教育学研究科障害児教育専攻

的タイプなどはある程度共通した特徴によって把握され、内向型、非合理的タイプなどは、意味の多様性、不可解さ、深さなどによっていくつかの意識の層からの表現が見られると指摘している。

ところで、箱庭は本来治療過程の中で作られるものであり、その場合は個々の表現だけでなく、何回かの作品についてその展開を系列的に理解していくことが重要であるとされている。しかしこれらの基礎的研究においては制作回数が1回限りであり、表現の展開という視点からの検討はなされていない。そこで本研究においては、3回の箱庭制作を行ない、パーソナリティのタイプによって表現にどのような特徴が見られるのかを、個々の作品、及びその展開について検討していく。

方 法

1. 被験者

大学生27名（男子11名、女子16名）

2. 実験期間及び実験場所

実験期間：平成 3年 5月16日～10月15日

実験場所：茨城大学教育学部治療教育室

3. 検査用具

(1) 箱庭制作：内法57×72× 7の砂箱、砂、及びミニチュア玩具の箱庭用具一式。

(2) MPI：MPI 評定用紙

4. 手続き

(1) 箱庭制作：箱庭表現の特徴を検討する際の1つの指標として「自己像」を置くことを課題とした。

実験者は箱の短いほうの辺に正対し、被験者に対し「この砂のはいった箱と玩具を使って自由に作ってください。ただし、その中に、自分と思えるものを置くようにして下さい」と教示した。制作中の問いに関しては受容的に答えた。所要時間、砂の使用の有無、自己像の種類と位置、玩具数と種類について記録した。制作回数は3回とし、各回の間隔は2週間以上とした。また作品は写真撮影して保存した。

(2) MPI：1回目の箱庭制作の前あるいは後に個別に実施した。

5. 結果の分析

MPIの結果より、被験者を外向群 [E(+)] 群] 9名、内向群 [E(-)] 群] 9名、神経質群 [N(+)] 群] 12名、非神経質群 [N(-)] 群] 8名に分け、以下の項目について分析し、各群の特徴について考察する。

①自己像について、②所要時間について、③砂の使用について、④使用玩具について。

結果

1. 自己像について

箱庭制作の課題とした自己像について、用いられた玩具の種類とそれが置かれた位置について検討した。

まず、自己像の種類については、玩具を6種類（人間、動物、植物、建造物、乗り物、その他）に分けて検討したが、人間の玩具の割合が比較的多かったため、この玩具を使用した者の割合の変化について検討した。その結果を図1に示す。E(-)群 [1回目8名 (88.9%)、2回目7名 (77.8%)、3回目4名 (44.4%)] とN(+)

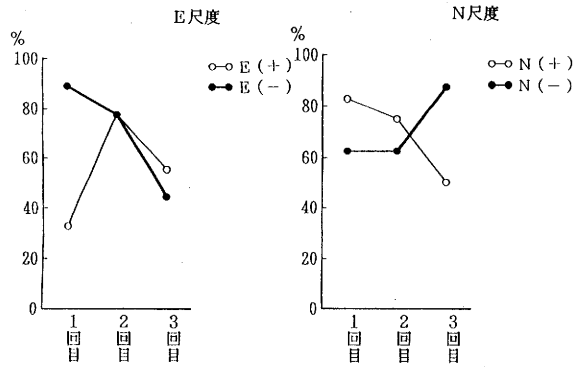


図1 自己像に人間の玩具を使用した者の割合

は回を追うごとに割合が減少し、E(+)

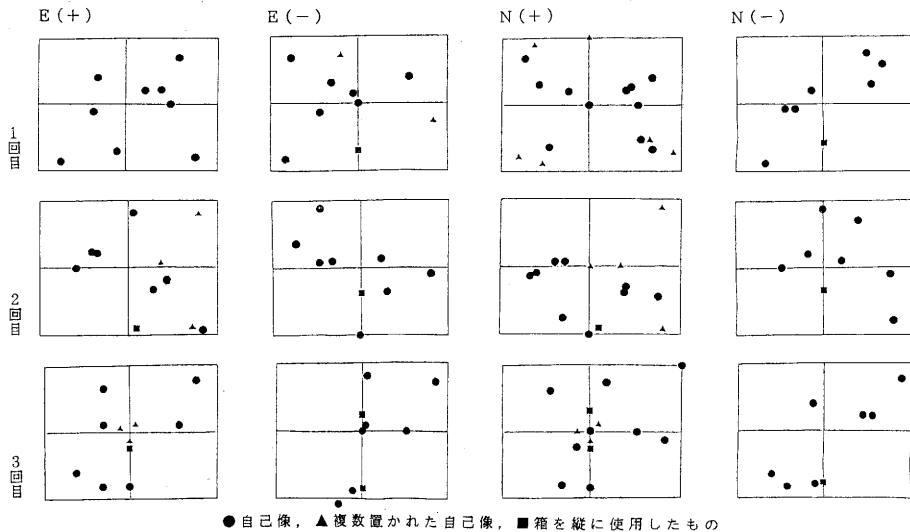
[1回目3名 (33.3%)、2回目7名 (77.8%)、3回目5名 (55.6%)] とN(-)群 [1回目5名 (62.5%)、2回目5名 (62.5%)、3回目7名 (87.5%)] は逆に1回目が最も割合が低く、E(+)

群では2回目、N(-)群では3回目が最も高い割合になっている。

次に自己像の置かれた位置について1~3回の変化を図2に示す。E群については、E(-)群は回を重ねるにつれ左側領域から右側領域へという変化が見られ、E(+)

群にも、3回目にやや左側領域への偏りが見られる。N群については、N(+)

群に全体から下側領域、中心部への変化が見られた。しかしN(-)群については、2回目にやや上側領域に集まる傾向はあるものの、あまりはっきりとした特徴は見られなかった。



●自己像、▲複数置かれた自己像、■箱を縦に使用したもの

図2 自己像の位置

2. 所要時間

各群の箱庭制作にかかった時間の平均値を図3に示す。E群では、E(+)群がだんだん短くなっていく（1回目27.7分、2回目20.8分、3回目18.8分）のに対し、E(-)群は2回目に長くなっている（1回目23.4分、2回目26.7分、3回目19.2分）。一方N群は、N(+)群は最初、他の群に比べ著しく時間が長い（1回目33.4分、2回目28.5分、3回目24.6分）のに対し、N(-)群は2回目に最も短くなり、3回目には再び長くなっている（1回目24.3分、2回目19.0分、3回目22.6分）。

3. 砂の使用について

箱庭療法において、砂の使用は積極性、創造性の現れであるとともに、その感触は適度の心理的退行を促して人間の内面に働きかける作用を持つといわれており、臨床的に注目される点の1つである。制作の際に砂を使用した者の割合は図4のようになっており、E群については全体的にE(+)群のほうが使用する割合が高く、また使用の割合が高かった回の次の回には減少するという特徴が示されている[E(+)群1回目9名(100.0%)、2回目6名(66.7%)、3回目9名(100.0%)；E(-)群1回目7名(77.8%)、2回目8名(88.9%)、3回目5名(55.6%)]。一方N群はN(+)群のほうがN(-)群より高い割合で使用されているが、両群とも回を追うごとに減少している[N(+)群1回目11名(91.7%)、2回目11名(91.7%)、3回目10名(83.3%)；N(-)群1回目7名(87.5%)、2回目6名(75.0%)、3回目5名(62.5%)]。

4. 使用玩具について

制作に使われた玩具を、総数と種類について検討し、それぞれ図5、図6に示した。使用玩具の総数は、E群はE(+)群、E(-)

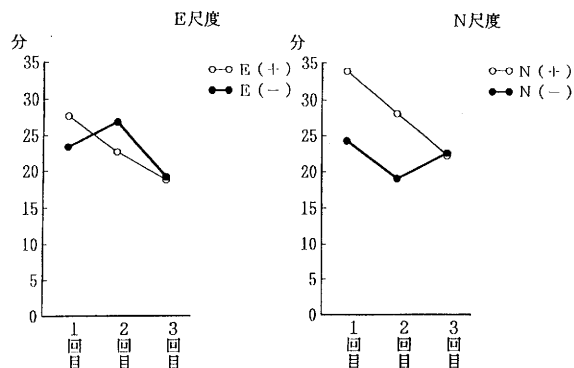


図3 所要時間

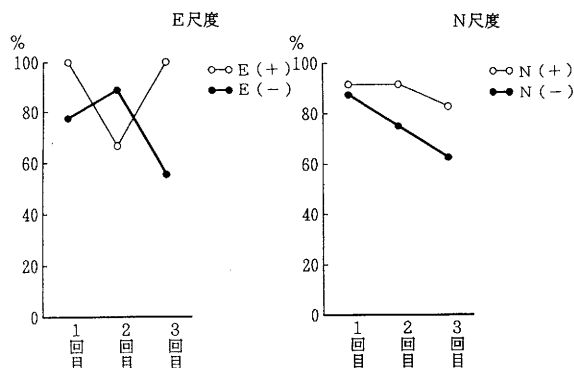


図4 砂の使用

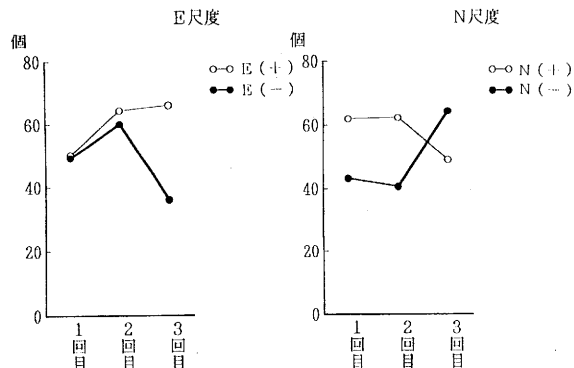


図5 使用玩具総数

群とも1回目から2回目にかけて、同じく
 らいの数で増加している。しかし3回目
 になると、E(+)群が2回目とあまり変わっ
 ていないのに対し、E(-)群には著しい減少
 が見られる。一方N群については、1、2回
 目はN(+)群がN(-)群に比べてより多く
 の玩具を使用しているが、3回目には、その
 傾向が逆転している。これらの結果から、E
 (+)群を除く3群が、3回目に変化を示した
 といえる。

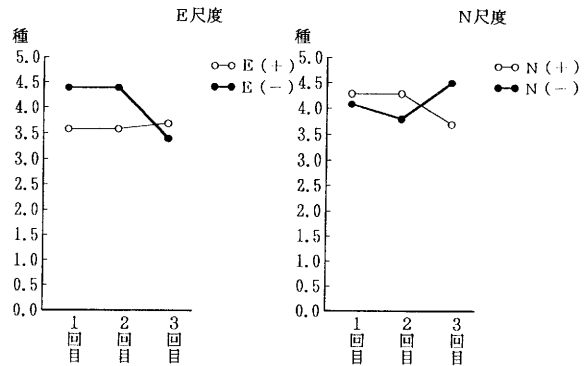


図6 使用玩具種類数

3回目の変化については、使用した玩具の
 種類についても同様の結果が見られる。玩
 具の種類については、自己像の種類の中の「その他」を除く5種類について何種類を使ったかにつ
 いて検討した。1、2回目については、E群ではE(-)群がE(+群)より多く、N群ではN(+群)がN(-
 群)より多くの種類を使用しているが、E(+群)が3回を通してほとんど変化が見られないのに対し、
 他の3群は、1、2回目はほとんど変化していないが、3回目になるとE(-)群とN(+群)は減少し、
 N(-)群は増加している。

考 察

1. 自己像について

河合(1973)は、箱庭療法における自我像に
 ついて、それは「自我そのもの」ではなく、過
 去や未来の自我、理想の自我、あるいはコンプ
 レックスと結びついた自我など自我のある側面
 の表現であり、また箱庭の中で「自分」として
 指摘されるものはほとんどの場合クライアント
 と同性の人物像であるが、異性像や動物像など
 が用いられることもあると述べている。本研究
 における自己像は課題として置かれたものでは
 あるが、上記のことから、やはり制作者自身に
 ついての内的イメージが、さまざまなレベルで反
 映されているのではないかと考えられる。

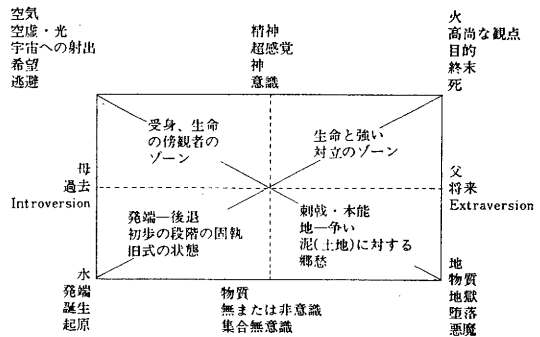


図7 空間象徴の図式 (グリュンワルト)

箱庭の人間の玩具には、現実的な社会的役割をもった人形が多い。そのため、具体的役割に自己を
 投影する場合には人形と自己像が一致しやすいが、内的イメージとしての自己像を投影しようとす
 る場合、必ずしもそのイメージに人形が合致するとは限らず、かえって人形の現実的イメージが自
 己像のイメージにそぐわないため、人間以外の玩具、あるいは作品全体のイメージによって自己像

が表現されると思われる。このことから、E(+)群、N(-)群の自己像は比較的意識的関与の強い自己像であるのに比べ、E(-)群、N(+)群の自己像は、回を重ねることにむしろ内的な表現が促進されることによって、人間の使用が減少したと考えられる。

次に自己像の位置について検討する。箱庭作品を理解する上で玩具が置かれる領域の使われ方も重要な視点であり、グリュンワルトの空間象徴理論（図7）から理解する場合が多い。E群の結果についてこの図から検討すると、E(-)群の1回目は左よりであってパーソナリティの特性と一致するが、3回目についてはE(+)群、すなわち外向群が内向の領域である左側に、E(-)群、すなわち内向群が外向の領域である右側に偏るという、逆の結果になっている。3回目におけるこのような逆転の現象は、どのような意味を持っているのであろうか。箱庭の左右と内向・外向との対応は一般に多く見られる臨床的な事実であるが、必ずしも公式的に解釈できるものではなく、例えば治療過程の展開時期には領域の使用が逆転することが臨床的に知られている。またMPIは質問紙法による検査であり、これによって測定されるパーソナリティの特性は被験者自身によって意識的に把握された自己評価によるパーソナリティであって、箱庭に現れるパーソナリティの特性とは必ずしも一致しないとも考えられる。性格検査の測定水準によりパーソナリティの異なった水準が測定されることを考慮する必要がある。その観点に立って結果を見ると、3回目は1、2回目に比べより内面のパーソナリティが表出されてきたとも考えられる。ユングは意識と無意識との相補性を重視し、彼の類型論においても外向性と内向性の相補性を指摘しているが、そのことから考えれば、3回目はパーソナリティの向性が意識レベルと無意識レベルとで逆転しているとも考えられる。

N群については、N(+)群が全領域から下側領域の無意識の領域、中心領域へという内的変化と対応する表現の変容を示しているのに対し、N(-)群には顕著な傾向は見られず、外的・表面的・意識的な作品が多いといえよう。

以上の結果から、E(+)群とN(-)群は意識的なレベルの作品が多いのに対しE(-)群とN(+)群は内界を投影した表現を示す傾向が見られる。また制作回数を重ねることによって内的表現が現れやすいことが考えられる。一般に治療法として箱庭が使用される場合には、何回かの作品を系列的に理解していくことが重要であるとされるが、本研究のように実験的な研究においても、1回限りの作品からパーソナリティを評価することには一定の限界があり、何度か制作させることの方法論的重要性が示唆された。

2. 所要時間について

E群の所要時間については、1回目はE(+)群の方がE(-)群よりも長く、木村（1982）による先行研究の結果とは逆になった。これは木村の研究が自由な制作であったのに対し、本研究では課題を与えての制作であったため、E(+)群の方が最初から課題にスムーズに取り組めたのかもしれない。また先行研究が1回限りの制作であったのに対し、本研究では制作回数を3回とし、それを事前に予告しているため、何度か制作するうちの初回は1回限りの制作とは意味合いが異なったとも考えられる。E(-)群の所要時間が2回目に長くなるのは、E(-)群はE(+)群に比べて、箱庭制作に自我関与するのに時間がかかるせいではないだろうか。内向型の特徴の1つに、新しい事態に適応するのに時間がかかることがあげられる。本研究の被験者は全員が箱庭制作は初めてであるため、E(-)群は1回目では表面的な表現にとどまり、2回目で自我関与した積極的な制作をするようになったと考えられる。このことは、自己像に人間の玩具を使用した割合や、後述の砂の使用などの結果とも一致

する。

N群では、最初N(+)群の方が著しく時間がかかっているが、3回目には両群の差はほとんどなくなっている。制作中の行動観察から、N(+)群は細部にこだわる傾向が強く、この取り組み方の違いが制作時間に反映しているのであろう。そして回数を重ねるにつれ、そのこだわりが薄れ、時間が短くなっていったと考えられる。

3. 砂の使用について

箱庭制作に砂を使用した者の割合は、E群ではE(+)群の方が高くなっている。先行研究(岡田・木村, 1975)においても外向型が内向型よりも多く砂を使用することが示されているが、本研究の方が全体的に割合が高い。またE(+)群は2回目のみ8名(88.9%)と若干低くなっているが、これは自己像に人間の玩具を用いた割合の結果(2回目が最も高い)と対応する。人間の玩具は前述のとおり現実的な役割をもっていると考えられることから、E(+)群においてこの回の箱庭は意識的関与の度合いの高い作品になっているということが考えられる。E(-)群において2回目に砂を使う割合が最も高くなるということは、所要時間と同じく、E(-)群が箱庭制作に積極的な自我関与を示すのは2回目以降であることが考えられる。E(+)群における2回目、E(-)群における3回目に砂の使用量が著しく減ったのは、前回砂に触れることで心理的退行を促されると、次の回では退行に対して心理的防衛が働いて、無意識的に砂に触れるのを回避しているためではないかと考えられる。一方N群はN(+)群の方がN(-)群よりも使用者の割合が高くなっており、N(+)群の方が内的表現の度合いが高いのではないかと考えられる。

4. 使用玩具について

先行研究(岡田・1981, など)より正常群の被験者は40~50個の玩具を使用することが知られており、木村(1982)は、使用玩具の数は活動性やエネルギー、外界への関心と関係があり、また神経質な傾向や強迫的傾向によっても増加することを指摘している。

E群について両群に著しい差が見られた3回目は、E(+)群の方がE(-)群より多く、岡田・木村(1975)によるQカード分類との関連を調べた研究の、内向群の方が使用玩具数が多いという結果と異なっている。しかし、木村(1982)のY-G性格検査との関連についての研究では、T(思考的側面)については内向型の方が玩具数は少なく制作時間は長いのに対し、S(社会的側面)については内向型の方が玩具数が多く時間が短いというように、T尺度とS尺度では向性の特徴が異なるという結果を示している。このことから、玩具数と内向-外向の尺度には明確な関連はないのかもしれない。ただし、N群はN(+)群の方が著しく多数の玩具を使用する傾向があり、木村(1982)の研究と一致した。

E(+)群を除く3群に共通して3回目に大きな変化があり、3回目の数は先行研究で示されている結果と逆になっている。これは自己像の位置のところで述べたように、MPIによって測定される意識的なパーソナリティに対する無意識の補償機能が、制作を重ねる経過にしたがって現れてきたとも考えられる。また、事前に3回の制作であることを予告したことも、その最後にあたる3回目にこのようなパーソナリティによる特性の違いを反映させるのに影響を与えたのかもしれない。使用玩具の種類においてもE(+)群以外の3群に3回目に変化が見られるが、これについても同様のことがいえよう。E(+)群には玩具総数、玩具種類数ともあまり変化が見られないのは、制作に意識的関与が強いためであると思われる。

5. まとめ

以上の考察からパーソナリティのタイプによる箱庭表現の特徴についてまとめる。

E尺度（外向・内向）に関して，外向群は現実的で意識的関与の強い箱庭を制作するのに対し，内向群は回を重ねるにつれて内的世界が反映され，自己像も内的なイメージを投影していると思われる人間以外の玩具を選ぶ傾向が強くなっていく。また両群とも自己像の位置や使用玩具から，3回目に意識的なパーソナリティの特性とは逆の表現をする傾向を示し，特に内向群はその傾向が著しかった。これは制作を重ねることで，意識に対する内的な補償機能が現れてきたものと考えられる。さらに内向群は自己像の種類，所要時間，砂の使用などから，箱庭制作に自我関与するのに時間がかかることが示された。これらのことから，内的なパーソナリティの特性は，制作回数を重ねることによって箱庭表現に現れやすくなるということができる。

N尺度に関しては神経質群が内的な変化にともなって表現内容も変化していくのに対し，非神経質群は意識的関与の強い表現であることが示された。なお神経質群では，最初表現の細部に対するこだわりや玩具を多数使用するといった強迫的傾向が見られたが，制作回数が進むにつれ，そのような傾向はなくなっていった。またE尺度と同様に，3回目に内的な補償機能によると思われる変化が見られ，玩具数に関して両群の数値が逆転している。

本研究は「自己像」という課題を与えての制作であるため，一般的には自由に作られる箱庭作品の表現とは異なる側面があることは否定できない。しかしパーソナリティによるいくつかの傾向が，作品や3回の制作の過程に示された。この結果から，箱庭表現の特徴を調べる際には，1回限りの制作では一定の限界があり，制作の展開や系列的視点から分析する重要性が示唆された。

引用文献

- 秋山幹男.1974.「幼児のサンドプレイ使用玩具による検討ー」『日本心理学会第38回大会論文集』, 530-531.
 岩堂美智子・木村晴子.1971.「箱庭療法に関する基礎的研究（その2）ー知的優秀児の箱庭表現をめぐってー」『大阪市立大学家政学部紀要』 19, 217-227.
 岩堂美智子・木村晴子.1972.「箱庭療法に関する基礎的研究（その3）ー3, 4, 5歳児の箱庭ー」『大阪市立大学家政学部紀要』 20, 175-184.
 岩堂美智子・奈比川美保子.1970.「箱庭療法に関する基礎的研究」『大阪市立大学家政学部紀要』 18, 183-192.
 河合隼雄.1973.「箱庭療法における自我像の表現」『日本心理学会第37回大会論文集』, 50-51.
 木村晴子.1982.「箱庭療法に関する研究ーY-G性格検査との関連ー」『心理測定ジャーナル』, Vol. 18, No.2, 12-16.
 木村晴子.1985.『箱庭療法ー基礎的研究と実践ー』（創元社）
 岡田康伸.1981.「箱庭療法に関する基礎的研究ー年齢差を中心としてー」『天理大学学报』 130, 10-27.
 岡田康伸.1972.「サンドプレイ技法の研究ー領域に関する研究ー」『京都大学教育学部紀要』 18, 231-244
 岡田康伸.1984.『箱庭療法の基礎』（誠信書房）
 岡田康伸・木村晴子.1975.「高校生の『箱庭』に関する実験的研究ー制作者のタイプとの関連」『日本心理学会第39回大会論文集』, 459.